

古井由吉

陣を組む女たち

中央公論社

円陣を組む女たち ©一九七〇年 検印廃止

定価 五〇〇円

昭和四十五年 六月十日初版印刷
昭和四十五年 六月二十日初版発行

著者 古井 由吉

発行者 山越 豊

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二二(代)

本文製版印刷 三陽社

カバー・扉 大熊整美堂

製本 協和製本

目次

木曜日に

5

先導獣の話

41

円陣を組む女たち

69

不眠の祭り

109

堇色の空に

157

あとがき

229

装幀・麻生三郎

創作集

円陣を組む女たち

木曜
日に

鈍色^{にびいろ}にけぶる西の中空から、ひとすじの山稜^{さんりょう}が遠い入江のように浮び上がり、御越山の頂きを雷が越しきつたと山麓の人々が眺めあう時、まだ雨雲の濃くわたかまる山ぶところの奥深く、幾重もの山ひだにつつまれて眠るあの溪間^{たにあひ}でも、夕立ち上りはそれと知られた。まだ暗さはほとんど変りがなかつたが、いままで流れの上にのしかかつていた雨雲が陰しい岩壁^{いわかべ}に沿ってほの明るく動き出し、岩肌^{いわだ}に荒々しく根づいた瘠木^{やせぎ}に曳裾^{ひきすそ}を絡み取られて、真綿のような優しいものをとどころに残しながら、ゆっくりゆっくり引きずり上げられてゆく。そして雨音が静まり、溪川^{たにがわ}は息を吹きかえしたように賑わいはじめる。

ちようどその頃、溪間の温泉宿の一部屋で、思わず長くなった午睡の重苦しさから目覚めた宿の主人が冷い汗を額から拭いながら、不気味な表情で滑り落ちる溪川の、百メートルほど下手^{しもて}に静かにかかる小さな吊橋を、まだ夢心地に眺めていた。すると向こう岸に、まるで地から湧き上がったように登山服の男がひとり姿を現わし、いかにも重そうな足を引きずって吊橋に近づいた。麓から長い単調な沢沿い道をたどってやって来る登山者たちは、短い隧道^{すいどう}を抜けていきなりこの溪間に出ると、ほとんど誰でも杳然と立ち止まり、唇気楼になぶられているように温泉宿に向かってしばらく目を凝らす。それから、可笑^{おか}しなほど慎重な足どりで吊橋を渡りはじめるものである。ところがこの吊橋は、あまり慎重になった人間の歩みと不思議によく共振し、彼らが一步一步、狭い間隔で置かれた板を丁

寧に踏んで橋のなかばまで来る頃には、急流から十メートル上の、ひんやりと香る溪間の空気の中で、うつろなきしみ声をたてて、ゆったりとうねり出す、笑い出すのである。それを眺めるのがこの主人の樂しみのひとつだった。ところが今、その男は吊橋にひよいと飛び乗ると、平地を歩くのと同じくも変わらない投げやりな足どりで、たちまちなかばまで渡ってしまい、そしてそこで、ふと谷底に何か面白いものを見つけ出したように立ち止まった。

橋はひどく神経質に震えたが、かえって大きく振れ悩んでいた。

そして夕べの仕事に立ちかけていた主人は、この光景に何とはなく目を惹きつけられて中腰のまま見まもった。すると、徒らにいら立っていた橋がゆっくりと、いつものようにのびやかに振れはじめた。目を凝らすと、男は両手を軽く左右のロープにかけて、十メートル下の濁流にうつとりと見入りながら、かすかに両膝を、たしかに両膝を、屈伸させている。やがて男の体は、まだ残る雨霧の中で重みを失って漂い出し、濡れて黒く光る二枚の岩壁の間で、ちょうどそのとき波のように高まった沢音にのって上へ下へと舞いはじめ、ときおり宙を斜めに切って滑った。それでも男は相変らず無頓着な体を棒のように宙に立てて、何やらしきりに試し戯れるように膝で吊橋を漕いでいる。

《馬鹿なことを……》と主人はまた床の上に坐りついてしまった。

しばらくして、ふたたび神経質に震える吊橋を後に捨てて、男はこちら岸の茂みの中に姿を消した。吊橋から温泉宿まではすぐ先に見える近さだったが、途中で裏山をかなり高く巻いて来るので、慣れない足では十分近くなかった。主人はまたぐったりと仰向けにかえって、今夜の唯一人の泊り客が表口から声をかけるのを待った。そしていつのまにかまたまどろんだ。まどろみの中で、重い山靴の音がすでに宿のすぐ裏手にさしかかったようだった。だがその音は、いつまでたっても表へまわる気配

がなく、軽く閉じた主人の臉おもての内側で夕立ち上りの薄暗さがそのまま溪間の早い夕暮れへと移っていった。と、主人ははっとして体をよじり起した。さつきから誰かが枕もとの窓から主人の寝顔をまじまじと見つめている。一心な、哀しげな物問ひ顔が……。起き上がって見ると、四角に滲む薄明りの中を、泣き疲れた子供のような蒼白い横顔が、すうつと横切っていくところだった。

登山者たちはみんなこの窓のそばを通って表口へまわるのだ。主人は誰もいない窓に向かってひとつ照れ笑いをして立ち上がった。

暗がりの中でも鮮かに木目の浮ぶ敷居の向こうに、静かな溪間の夕暮れを背負って人影が一本の若樹のように細く立って、黙って主人に微笑みかけていた。長い山径やまみちを黙々とたどって来た単独行の男たちは、だいたい誰でもそうだった。そんなふうに敷居の前で立ちつくし、かすかに肩で息をついて、甘ったるい微笑みを浮べてしばらく主人の顔を見つめ、それからおずおずと足をもち上げてこちら側に置くと、たちまち口を始めとしてすべてが軽くなり、薄気味の悪いほど人なつこくなるものだ。ところが、この男はよほど靴が重たいのか、いつまでも足を上げようとせず、額や頬や襟首をかわるがわる撫ぜまわしては、まるで素裸にされた人間のように、蒼ざめた顔できまり悪そうに笑うばかりだった。主人はなにかこの男が曖昧な笑みを浮べたまますうつと立ち去ってしまいうような気がして、《まあ、お入りなさい》と奥から声をかけてやった。ところがそれを聞くと、男は全身をひどく震わせて、いまにも檻ぼち樓ろうの塊りのように崩れ落ちてしまいうように見えた。だがおののきの波が過ぎると、男はまた呆然と敷居の向こうに根を生やして、いよいよきまり悪そうに、ほとんどすまなそうに笑った。それから男はゆっくりと足を地面から抜き、しばらく躊躇ためらった後、その足を敷居のこちら側の土間に置いた。

そして主人の目の前に、裸足の男がふらつき入って来た。そして傷口も白く洗われた素足と、主人の顔とをかわるがわる見つめて、何かを語ろうと、しきりに唇をふるわせた。

《あの時は、あんたの前だが、すこしばかりぞっとさせられたよ》と、主人は後になって私に語ったものである。

それは木曜日のことだった。

そうである。温泉宿の土間に崩れ落ちて宿の人々の手で奥に運びこまれた私は、夜更けにぼんやり目覚めて、いったい何のつもりだったのだろうか、《今日は何曜日》とたずねたものだった。すると、《今日は木曜日だが……》と低くつぶやいて私のほうへ滑り寄って来る影があり、それを始めとしていくつかの影が私をめぐってほの暗い光の中に漂った。見ると、どれも真剣な物問いの顔、眉を寄せて苦しむ夜叉の面のような顔だった。私は怯えた。何はともあれ、この人たちの苦しげな顔を宥めなくてはならない。そのために、この一心な物問いの顔の対象である私は、私はただそれだけのために、厭がる心に鞭打って、切れ切れない記憶を集めにかかった。いままでに味わったこともないような、言うに言われぬ息苦しい緊張だった。そしてその果てに、私の中でひとまとまりの記憶が鮮明な像を結びかけた。ところがその時、ひときわ訝えた意識の中で、私は突然、青氷を思わせる明るい硬直の中に閉じこめられた。私は山の上で起った事のすべてを知っていた。だがそのあまりに冷い鮮明さのために、私は記憶の一端すら、眼の前で暗く息づいている人たちに伝えるすべを知らなかった。そして明るく輝く不安の中から主人の顔を見つめながら、私はまた昏迷の淵へ滑り落ちた。

私は、宿の主人が考えたように、麓から沢沿い道をたどってやって来たのではなかった。その木曜日の早朝、この温泉宿から御越山を隔てて西へほぼ一日離れた、ある木深い鞍部^{おんぶ}で、まだ朝の光に触れられない木々の香につつまれて、私はいましがた閉じたばかりの無人小屋の板戸をまじまじと眺めていた。人気ない裏尾根へ入ってから三度目の夜が明けたところだった。

月曜の朝、いつもなら通勤急行がホームに入って来る時刻に、私は表尾根を行く色とりどりの登山着のハイカーをやりすごして、ほとんどそれと目に立たない分岐点から、裏尾根への道に入っていた。そして人の気配が遠くなった頃、見晴しのきくところに立ち止まって、雲ひとつない朝の空の下にまるで暗い卵を腹に抱く海老^{えび}のような姿で横たわる裏尾根を、取っつきから最後の御越山の登りまで一望におさめながら、五年目の勤め人の、誰に向けられるでもない皮肉な感慨をひとりで味わっていた。

ところが、それから三日間、人の姿のない木深い尾根道をひとりで黙々とたどって来て、木曜日の朝、小屋の中がわずかに白^{しろ}んだのを險^{また}に感じて、寝袋の温みの中から這い出した私は、ふと自分のうちに、音もなく眠りから這い出す一頭の獣を感じたものである。そして、まさにひたすらな眠りから這い出て、ひたすらな食欲に耽る獣のように、私は顔も洗わずに食事にかかり、顎を鈍重に動かして味気ないパンを噛みながら、すでにその時から、何かをまじまじと眺める気持になっていた。何というあさましい孤独だろう。夏の終りに一週間の休暇をとって、行く先を誰にも知らせず、帰っても旅のことを誰にも語るまいと心に決め、こうして日頃の孤独のうちにさらに孤独をつくり出したそのあげくが、私は暗い藪^{やぶ}から藪へと地を低く這う獣のように、言葉もなく、笑いもなく、恥らいもなく、まどろみからまどろみへと這いすすむのだ。小屋の戸を閉じた時、私はふと無恥な夢から覚めてひそ

かに赤面する人間のように立ちつくした。しかし私は目覚めたと思いながら、じつはいつそう深い夢の中へ這いこんだのではないだろうか。それにしても私は、いったい何をあんなにまじまじと眺めていたのだろうか。

しばらくして、私は小屋を後に棄てて今日の登りにかかった。私が登るにつれて、陽が私の背後で段々に高く昇り、その下にまだ一様にひろがる灰色の靄もやの中から、まず尾根がひとすじずつ浮び上がって青い背で灰色の海を分け、やがて尾根すじのところどころに濃くわだかまる陰の中から、まるで幾重にも畳みこまれていた胚芽のように、無数の小さな起伏がつきつきに展ひろびてきた。それらの起伏を私はこの三日間、ほとんど見晴しもなく、ほとんど休息もとらず、ひとつひとつ喘あえぎ越して来たのだった。それがいま澄んだ朝の光の中で、ひとつづきの淡い夢のような流れとなつて私の眼前に展ひろいてゆく。私は元気に登りつづけた。うっとり朝日を浴びる老樹の間を、木洩れ日の泳ぐ苔の香りの中を、この三日間歩んだどこよりも高い道を、いよいよ高くなつてゆく道を。

だが数時間後、早朝には雲ひとつなく晴れわたっていた空が、太陽に炙あぶられて白く濁りはじめたのを、私はしきりに気にしながら歩いていった。御越山の頂上からの見晴しが心配だったのだ。

そしてまた数時間後、ふたたび見晴しを失つて黙々と歩んで来た私の前に突然、高原が広々とひらいた。高原はゆるやかに、ごくゆるやかに盛り上がってゆき、ようやく尾根らしい形をつくったかと思ふと、いきなり水から上がる水牛のようにみるみるせり上がり、そして遙か上の方、点々と立つ樹木がそれぞれ謎めいた杭のように見えるあたりで、空から重く垂れ下がる濃い霧の中へもぐりこんでいた。しかし疲れを覚えはじめた私はそれを気にもとめず、足もとばかり見つめて登りつづけ、いつか濃い霧の中へ入っていった。

つぎに気づいて見ると、私はひどくやせ細った尾根の上を歩いていた。左右には、黒い豊かな山肌の気配がほのかに感じられるだけで、ほとんど私の足もとから直接に、霧の海がいっさいを呑みこんでひろがっていた。そして右から左へ音もなく吹き過ぎる灰色の波の中を、黒く濡れた岩尾根がひとすじ細々とつづき、五十メートルほど先でいきなり物狂わしく空につかみかかり、それからふっと掻き消された。どこやら深い底から、友を呼んで落ちる岩屑の音が暗くこもって聞こえてきた。

しかし、つぎにまた歩みを止めた時、私はもう御越山の頂上に立っていた。

こうして私は御越山の頂上に立った。濃い霧のために見晴しはとうとう得られなかったが、しかし私の背後には、私のたどって来た尾根道が、ちょうど月曜の朝に青く澄んだ空の下で分岐点から一望におさめた姿のまま、ひとすじ鮮かに連なっているはずだった。いや、その道はもっとさかのぼって、都会の私の生活の中を、絶えず思いを寸断する雑事と無数の浅い印象の間を、細々とひとすじにつづいていくはずだった。疲れはてて下宿にもどって来た夜更け、寝てしまうよりほかにしようのない体をしばらく机の前に据えつけて、五万分の一の地図を眺めていた時、私にとって御越山は物憂い夢にすぎなかった。なるほど、ある日、私は休暇を願い出て山の支度にとりかかるかもしれない。いったんそうと決まれば、私は考えても溜息の出そうな面倒くさい手続きをひとつひとつ踏んでいくにちがいない。そして結局、私は御越山の頂上に立つことになるだろう。しかしそれは実現ではない。そう私は思ったものだった。実現とは、机の前で物憂い夢に耽ける私にとって、ほとんどひとつの奇跡、日に日に無数の事どもが現実には運ばれる世界の彼方に聳え立つ、この世ならぬ青い山だった。そして今、私は現に御越山の頂上に立っている。濃い霧だった。何もかも霧の海に沈んで、霧よりも不透明な時間の海に沈んで、姿かたちを失ってしまった。そして捉みどころもない混沌の中で、山頂に立つ

私は下宿の机の前に坐る私と、まるでシャムの双子のようにひとつに重っていった。私は霧に濡れた岩を重い山靴で踏んで、自分も霧に濡れてかすかな寒気を覚えながら、気ままに夢見つづけた。私は夢の中から冷ややかに眺めていた。前方を、東の方を、何ひとつ遮るものなくほんとうの海までつづく虚空を……。そうなのだ、御越山はこのあたりの最高峰であると同時に最東端であり、しかも山頂の東側はすぐに断崖となって百メートル以上も垂直に落ちてゐる。それゆえ、ここから東にあたる温泉宿へ下る道も、いったん絶壁を北へ大きく迂回してゐる。

ところが、私がおもひさまに虚空を眺めていると、あらゆる姿かたちを呑みこんで静まりかえる霧の海のおよそ偶然に一箇所がほのかに明るんで、その奥から何やら暗いものが大きな魚のようにすうっと浮び上がり、そして遠近のつかない中空に、一枚の岩がぼんやりと浮かんだ。ひとすじの亀裂が鮮かに見えた。それは岩石の真只中からふと針のようにやさしく生まれ、黒い岩層をすこしずつ押し分け、いたいけに喘ぎながら何千年もかかって押し分け、ようやく人の手がかかるほどの裂け目をこしらえたかと思うと、また針ほどの細さになって岩層の中へ消えていた。そして突然、東の虚空を破って、思いもよらない高みから、巨大な岩壁が私の眼前にいつい立つた。陰惨な岩肌の一箇所濃紅をとろりため、黒々と濡れて光る岩層を貫いてうっすらと紅いものを幾すじか垂らし、岩壁はみるみる私のほうに迫り、私の上にぐらりと傾きかかり、私を二、三步後ずさりさせ、それからふと跡かたなく掻き消された。驚きではなかった、夢の覚めぎわの途方もない恣意感が私を捉えた。いま見たものが怖るべき自然なのか、それとも私の幻なのか、それはふたたび沈黙した霧の中ではひとえに私の、ここに唯ひとり立つ私の決定にかかっている……。

しばらくして私はようやく我にかえり、自分が山頂ではなくて前山に立って、山頂の思いに耽って